

現代のことは

やまだ 奨治



大学院で講義をするために、この五月をパリで過ごした。前半はくもりがちだったが、後半はぬけるような青空の日に恵まれて快適だった。

晴れた日はとても紫外線が強い。一日外を歩いただけで日焼けした。夏のあいだ、肌を大きく出している女性が多いので、目のやり場に困る。白い肌

いる。ああなるくらいなら日に焼かなければいいのに、と東洋人のわたしは思う。ヨーロッパはだいたい日差しが弱いので、日光を浴びることへのあこ

がれがあるらしい。お国が違えば身体感覚もずいぶん違うものだ。そんな夏のパリの楽しみは、路上にテーブルを並べたオーブン・カフェで、夕方のひとときを過ごすことだ。日本ではオーブン・カフェは「法度らしいので、青空の下、街行くひ

パリのカフェと日本のファミレス

とや車をながめ、ストリート・ミュージシャンのアカordeオンを聞きながらのコーヒーを、ここぞとばかりに楽しんできた。

天気がいいと、どこの店もどん欲にテーブルを広げるので、ひとりの店員が担当する客の数が多くなる。だから注文をするにも、勘定をお願いするにも一苦労だ。それほど大声をたさなくともいい距離に店員が来たら、タイミングをみはからって、

下手なフランス語で「すみません」と声をかける。そうでもないけれど、遠くにいる店員と目が合いそうになった瞬間に、サッと手で合図を送る。店にもよるけど、それでも店員はすぐにはテーブルに来てくれない。「わかったよ!」という目配せだけ

して、別の用事をひととおりすませてから、思い出したようにわたしのところへ来る。やってきた店員は、たいていニコリともしない。客がマダムなら違うのかもしれないけど、わたしにはぶっきらぼうに注文を聞き、コーヒーを運び、代金を受け取る。客に対してどうして笑顔ができないのかと、ちよつと腹が立つ。

日本に帰って、新鮮に感じたことがある。それは、どの店でも店員が笑顔を向けてくれることだ。パリの店員のあいそのなさを味わったあとだと、たとえ営業用の作り笑いとしても、うれしいものだ。だけど、帰国後はじめてファミレスに入ったとき、テーブルのボタンをピッと押せば、にこやかな店員がす

ぐにやってくるのには、何か人間性のなさを感じた。たしかに便利な装置だが、店員も機械の一部みたいだ。ボタンがあるから、店員は客のほうをあまりみてもいい。パリのカフェでは、店員をつかまえるのが一苦労だったけど、わたしと店員のあいだに、感情的で人間的なコミュニケーションがなかった。そう思うと、日本のファミレスのボタンが、何だかうす気味悪いものにみえてきた。

こんどからは、みえるところに店員がいれば、声かけや合図で呼んでみよう。そして気の利いた冗談でもいって、すてきな店員さんから、営業用じゃない笑顔を引き出せたらいいな。
(国際日本文化研究センター准教授・情報学)